

# 接続詞教育の見直しの必要性

——接続詞の用法と学習者の使用頻度、誤用から——

呉 蕾 藝

## 1. はじめに

本稿は日本語教育における接続詞の教育方法を見直す必要性を提案するためのものである。日本語教育は学習者の必要とする日本語能力の多様化に伴い変化してきている。筆者はこの現実から、接続詞の教育の必要性に注目した。

石黒（2008）は、接続詞は、書き手側から見ると、それを使うことで自分の文章を論理的に書くことが出来るものであり、読み手側から見ると長い文章の接続関係が分かり、文脈が把握できるものであると述べた。さらに、重要な情報に焦点を絞ったり、内容の含意が分かりやすくなるとも指摘した。

また、学習者は日本の高等教育機関に進学するために受ける必要がある「日本語能力試験」や「日本留学試験」で、必ず適切な接続詞を問う問題と出会う。つまり、学習者にとって接続詞は学習しなければならない項目であるのだ。

このように重要な役割をしている接続詞だが、日本語を長く勉強してきた何人もの学習者から「接続詞がよくわからない」としばしば言われたことがある。

筆者も日本語教育を研究し始める前には日本語を勉強してきた学習者の1人として、接続詞の教育が充分に行われていないのではないかと疑問を感じていた。

ゆえに、筆者は本稿で学習者が接続詞を使いこなせない理由を調査し、その原因を分析、考察して行こうと思う。

## 2. 先行研究及び本稿の研究方法

日本語学の中の接続詞の分類や役割の研究は続いているが「日本語教育」の中での接続詞はそれほど研究が進んでいない。実際、今回の論文のため「接続詞」先行研究を探してみたところその数が少なかった。石黒（2008）は次のように述べている。

日本語で書かれた、接続詞にかんする著作や論文は、これまで八〇〇以上発表されていますが（北海道教育大学札幌校のウェブサイトにある、馬場俊臣氏作成の接続詞関係研究文献一覧による）、その多くは他に専門を持つ人が試みに書いたと思われるもので、接続詞を継続的に研究している研究者はごくわずかです。専門家の間では、あまり人気

のあるテーマではないのです。

このように、接続詞の研究は他の日本語の研究に比べると盛んでないが、接続詞は文章の中で大変重要な役割をしている。しかし、その重要さとは反対に教育はそれほど行われていないと思われる研究結果がある。

李 (2006) は韓国の高校生の日本語学習者を対象にした接続詞の理解度を分析した論文で、10%近くの学習者が接続詞が理解できていないという結果を出した。また、用法を理解しているかを分析したところ、混同している学生が少なくなかった。このような結果に李 (2006) は教科書の例文の少なさを指摘した。しかし、筆者は例文の数ではなく、どう理解させるかという教え方に注目したい。

次に、鈴木 (2005) は李 (2006) より上級レベルの学習者を対象にある二つの文を見せて、その二つの文をつなげる正しい接続詞を選ばせる問題を出した。この問題の中で「それから」「そして」と「それで」の誤用が多く見られたが、筆者はその理由をこの3つの接続詞が韓国語に訳すると全部同じく「クリゴ」になることに注目した。もちろん、正確には文の内容や状況によって変わるけれども、大概この「クリゴ」という接続語で表すことが出来てしまう。接続詞を「かばん」や「鉛筆」などの単語のようにただ覚えさせる教授方法で起こりうる弊害であろう。

また、金 (2013) は「YNU 書き言葉コーパス」で学習者が日本人より全体的に接続詞の使用頻度が高いと言っている。その中で特に「そして」の使用が幅広いが、上級になるにつれ使用が減少すると発表した。それは、「そして」の代わりに他の接続詞の使用が増えるからと説明している。また、文章のジャンル別に使われる接続詞の使い分けも足りないと指摘したが、この傾向は下位群から上位群まで学習者の全般に見える問題だという。この研究では横浜大学に通っている学生を対象としたので、下位群といっても日本語教育でいう初級や中級より高いレベルだと考えられる。ということは、「そして」のように日本人の使用頻度も高い接続詞さえ理解が足りていないことを意味するといえよう。これは学習者の理解度の問題ではなく、日本語の教育の中で接続詞がどのように教えられているかを考えさせる結果だと思う。

最後に、李 (2011) は逆接続詞「ところが」と「しかし」の意味分析を行った論文で、その意味と機能に関する先行研究の問題点を取り上げている。「ところが」と「しかし」の用法は異なるにも関わらず、今まで発表された関連研究結果はそのようなことを取り上げていない、もしくは理論が足りていないと指摘した。筆者はこの指摘から今までの教育方法やその研究に限界があることを表すと考えた。

本稿の日本人の使用と学習者の使用状況を、コーパスを使って行い、結果を比較する。そして日本語教科書での出現傾向を調査する。これらの結果を分析するという方法で行う。

### 3. 学習者を対象にしたアンケートの結果

筆者は日本語を外国語として勉強している学習者を対象としたアンケートを行った。対象は韓国人44名、アメリカ人5名、総49名に次のような形式で返事を求めた。期間は2013年9月9日から12日まで、インターネット上で無記名で行った。

グラフ1はそれぞれ会話、作文、読むときの接続詞の難易度について聞いた結果である。

また、学習者はどのような理由で接続詞を難しく感じるのだろうか。下の図2がその内容を聞いた質問4の結果である。

このアンケートの結果、全体の60%が接続詞を難しいと回答した。特に作文のときが難しいという回答が多かった。接続詞がどうして難しいかという質問には「意味は分かるが、ニュアンスや使い方がはっきり分からない」という回答が全体の78%を占めている。特にニュアンスが難しいということは教育されるとき、接続詞の役割を詳しく確かめる過程がなかったとも思われる。このような考えを裏づける根拠は質問5番の結果である。

図1) 学習者の接続詞に対する意識調査

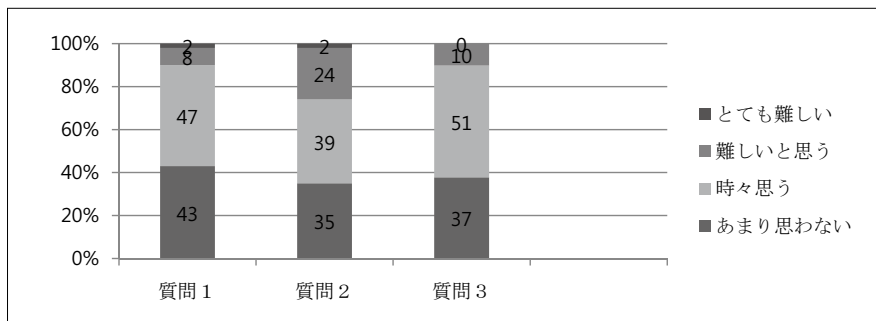
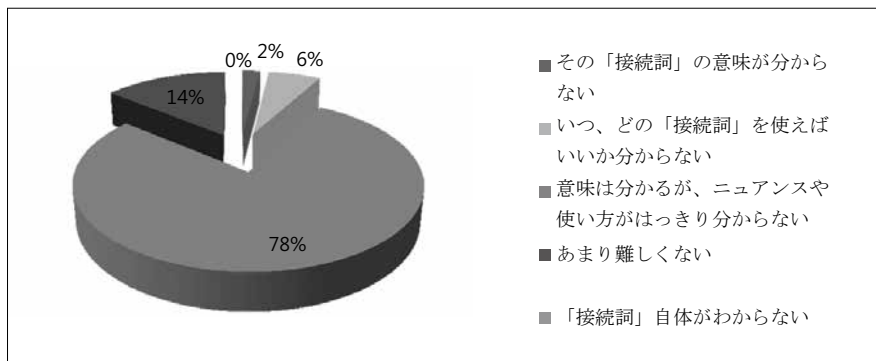


図2) 接続詞はどのように難しいか



この項目は記述式ということもあって、回答しなかった学習者が7名いた。質問5の回答者42名のうち35名が接続詞をより詳しく教える教育が必要と回答した。その理由は様々であったが、一番多かったのは19名の学習者による「微妙なニュアンスの区別がつかなくて作文や文章を読む際に困難を感じるから」という答えである。また、5名の学習者が会話の場合に「適切な接続詞が浮かばなくて会話が詰まってしまう経験があったから」と回答して、24名に至る学習者が接続詞の教育が足りない指摘した。

残り9名の回答は「用例を多く取り上げ自然になれるようにして欲しい」「なにより作文の中で困る場合が多い。作文に必要なものをもっと集中的に教えて欲しい」「接続詞は学生の誤用が高い品詞である。もっと徹底的に教育する必要がある」などであった。

以上の内容から筆者は現在、日本語の教育の中で接続詞の教育が学習者のニーズに応じていないことに確信を持ち、その理由を確かめていこうと思う。

#### 4. 日本人と学習者の接続詞の使用頻度

接続詞教育の見直しのため、実際学習者の中で接続詞がどのように使われているかを分析する必要がある。その方法として、日本人と学習者の接続詞使用頻度を比較し、分析することにする。

また、その分析結果と日本語教科書の出現頻度を比較することで現在、接続詞がどのように教育されているか考察する。

- ① 石黒 (2008)『文章は接続詞で決まる』に分類されている接続詞116個を基本にして、日本人の使用頻度を調べる。
- ② 調べる方法は「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を使い、検索をかける。検索する対象は「書籍」「雑誌」「新聞」「教科書」の書き言葉と「Yahoo ブログ」「Yahoo 知恵袋」のように話し言葉に近いもの、二通りである。
- ③ 学習者の場合は116個の接続詞の書き言葉は「学習者作文コーパス」で、話し言葉は「KY コーパス」を使い検索して使用頻度の順位を決める。この結果を比較し差異をあきらかにする。

##### 4. 1. 書き言葉による使用頻度

116個の接続詞を検査した結果、日本人のその総数は254、726件であった。表の比率はこの総数に対するものである。学習者の接続詞の使用総数は1142件であった。全体の結果から見た日本人と学習者の接続詞の使用頻度には大きい違いは見えなかった。

結果を詳しく見てみると、使用頻度5位までの結果は日本人が「しかし」「そして」「また」「だから」「だが」の順、学習者は「そして」「しかし」「また」「でも」「だから」順で上位のものは似た傾向を見せた。しかし、学習者の検索結果の171件の「そして」の中、誤用が17件あった。つまり正用は154件で、正用の割合は13.69%まで落ち、2位の「しかし」との差は1.17ポイントまで縮む。

表 1) 日本人と学習者の接続詞の使用頻度—書き言葉

日本人の接続詞使用頻度—書き言葉				学習者の接続詞使用頻度—書き言葉			
順位	接続詞	使用数	比率 (%)	順位	接続詞	使用数	比率 (%)
1	しかし	37674	14.68	1	そして	171	14.97
2	そして	26161	10.19	2	しかし	143	12.52
3	また	21136	8.23	3	また	123	10.77
4	だから	12808	4.99	4	でも	104	9.11
5	だが	10976	4.27	5	だから	101	8.84
6	ただ	10966	4.27	6	それで	71	6.22
7	でも	10565	4.11	7	それに	41	3.59
8	つまり	8301	3.23	8	まず	39	3.42
9	それに	8063	3.14	9	たとえば	27	2.36
10	それで	7337	2.85	10	それから	24	2.10
11	ところが	5938	2.31	11	そのため	22	1.93
12	さらに	5735	2.23	12	つまり	21	1.84
13	たとえば	5058	1.97	13	なぜなら	20	1.75
14	したがって	4605	1.79	14	だが	17	1.49
15	ただし	4562	1.77	14	けれど	17	1.49
16	しかも	4411	1.71	16	このように	13	1.14
17	そのため	4285	1.67	17	さらに	11	0.96
18	それから	3982	1.55	17	したがって	11	0.96
19	すると	3456	1.34	17	では	11	0.96
20	すなわち	3335	1.30	17	そうすると	11	0.96
21	まず	3033	1.18	21	その後	10	0.88
22	その後	2710	1.05	21	一方	10	0.88
23	一方	2647	1.03	23	ただ	8	0.70
24	それでも	2630	1.02	23	それでは	8	0.70
25	実際	2439	0.95	23	それなら	8	0.70
26	けれど	2324	0.90	26	しかも	7	0.61
27	もっとも	2039	0.79	27	ところが	6	0.53
28	なぜなら	1931	0.75	27	とにかく	6	0.53
29	このように	1928	0.75	29	それでも	5	0.44
30	こうして	1879	0.73	29	とくに	5	0.44
31	とくに	1809	0.70	29	そうしたら	5	0.44
32	あるいは	1661	0.64	29	なぜかという	5	0.44
33	とにかく	1534	0.59	33	すなわち	4	0.35
34	むしろ	1415	0.55	33	こうして	4	0.35
35	では	1258	0.49	33	だけど	4	0.35
36	結局	1209	0.47	33	そのうえ	4	0.35
37	だけど	1207	0.47	37	それとも	3	0.26
38	かつ	1195	0.46	37	それにしても	3	0.26
39	ちなみに	988	0.38	37	以上	3	0.26
40	だって	905	0.35	37	ですが	3	0.26
41	というのは	867	0.33	37	そのかわり	3	0.26

42	事実	801	0.31	37	または	3	0.26
43	そうすると	782	0.30	43	ただし	2	0.18
44	ところで	774	0.30	43	実際	2	0.18
45	それとも	745	0.29	43	もともと	2	0.18
46	さて	731	0.28	43	むしろ	2	0.18
47	というのも	712	0.27	43	結局	2	0.18
48	それなのに	683	0.26	43	というのは	2	0.18
49	それにしても	668	0.26	43	とはいえ	2	0.18
50	それでは	657	0.25	43	かわりに	2	0.18

\*日本人の「だから」のうち「ですから」1883件、学習者の「だから」のうち「ですから」16件

日本人も学習者も上位3位までの「しかし」「そして」「また」の使用率が接続詞使用総数の30%以上を示していて、よく使う接続詞は決まっていると言える。しかし、上位5位までの使用率は日本人より学習者の方が12ポイント高く、学習者の方が使用に偏りがあると考えられる。

日本人の使用頻度、使用率が高い語は「ただ」「つまり」「ところが」「さらに」などだが、その中には学習者の使用頻度、使用率が低い語もあった。

#### 4. 2. 話し言葉の使用頻度

話し言葉の場合、116個を検索した結果日本人の総数は62,001件で、学習者は1952件であった。

話し言葉は書き言葉と比べ、全体的に大きい違いを見せる。まず、書き言葉のように同じ順位のものがあり見当たらない。使用率も日本人は書き言葉と似たような数値だが、学習者は1位の「でも」だけで30%近く示す。

詳しく見てみると、使用頻度5位までの結果は日本人が「でも」「しかし」「そして」「ちなみに」「また」の順、学習者が「でも」「だから」「たとえば」「それで」「そして」の順で書き言葉と比較して使用頻度の差が明確である。

また、日本人の場合、5位までの使用率が書き言葉と2ポイント程度の差で話し言葉の方が少し高かったが、学習者は書き言葉より話し言葉の方が17.06ポイントも高く、偏りが激しかった。

それに、日本人の使用頻度4位の「ちなみに」が学習者では一回も使われておらず、この例のように日本人の使用頻度が高い語と学習者のそれは書き言葉より差が激しい傾向があった。

それに、学習者の「そして」は話し言葉でも誤用は多かったし、似た作用の接続詞、たとえば「ところが」の使用頻度は低くて「しかし」の使用率が日本人より高いなど、慣れている接続詞への選択が目立った。

表2) 日本人と学習者の接続詞の使用頻度—話し言葉

日本人の接続詞使用頻度—話し言葉				学習者の接続詞使用頻度—話し言葉			
順位	接続詞	使用数	比率 (%)	順位	接続詞	使用数	比率 (%)
1	でも	10016	17.51	1	でも	574	29.42
2	しかし	4793	8.38	2	だから	296	15.17
3	そして	4369	7.64	3	たとえば	211	10.81
4	ちなみに	3091	5.40	4	それで	196	10.04
5	また	3000	5.24	5	そして	153	7.84
6	だから	2737	4.78	6	それから	104	5.33
7	ただ	2246	3.93	7	けど	85	4.35
8	それで	2141	3.74	8	また	84	4.30
9	それに	1694	2.96	9	ただ	55	2.81
10	まず	1403	2.45	10	あるいは	29	1.48
11	しかも	1360	2.38	11	そうすると	23	1.17
12	その後	1307	2.29	12	つまり	20	1.02
13	さて	1291	2.26	13	しかし	19	0.97
14	ただし	1148	2.01	14	だけど	19	0.97
15	それでも	1015	1.77	15	では	11	0.56
16	実際	995	1.74	16	けれども	10	0.51
17	つまり	877	1.53	17	それでも	8	0.41
18	それから	750	1.31	18	それに	6	0.30
19	結局	674	1.18	18	または	6	0.30
20	さらに	663	1.16	20	だって	5	0.25
21	だって	617	1.08	20	それでは	5	0.25
22	とにかく	571	1.00	22	ところが	4	0.20
23	では	531	0.93	22	一方	4	0.20
24	それにしても	468	0.82	24	ですが	3	0.15
25	すると	467	0.82	24	それとも	3	0.15
25	ところが	467	0.82	24	どっちみち	3	0.15
27	ですが	464	0.81	27	それにしても	2	0.10
28	一方	410	0.72	27	すると	2	0.10
29	そのため	385	0.67	27	だが	2	0.10
30	だが	374	0.65	27	とくに	2	0.10
31	だけど	359	0.63	27	かえって	2	0.10
32	けど	351	0.61	32	ところで	1	0.05
33	ところで	313	0.55	32	なのに	1	0.05
34	むしろ	298	0.52	32	そのうえ	1	0.05
35	それとも	294	0.51	32	いわば	1	0.05
36	以上	278	0.49	32	ようするに	1	0.05
37	たとえば	277	0.48	37	ちなみに	0	0.00
38	よって	251	0.44	37	まず	0	0.00
39	それでは	250	0.44	37	しかも	0	0.00
40	それでは	250	0.44	37	その後	0	0.00
41	ついで	238	0.42	37	さて	0	0.00

42	そうすると	206	0.36	37	ただし	0	0.00
43	もしくは	192	0.34	37	実際	0	0.00
44	もともと	186	0.33	37	結局	0	0.00
45	なぜなら	179	0.31	37	さらに	0	0.00
46	なのに	159	0.28	37	とにかく	0	0.00
47	したがって	157	0.27	37	そのため	0	0.00
48	最初に	152	0.27	37	むしろ	0	0.00
49	または	148	0.26	37	以上	0	0.00
50	けれど	145	0.25	37	よって	0	0.00

\*日本人の「だから」のうち「ですから」が545件、学習者の「だから」のうち「ですから」が71件

## 5. 日本語教科書の分析

筆者は日本人と学習者の接続詞使用頻度の差が生じる原因を探るべく、学習者を対象にした接続詞の教育はどのように行われているか、実際に教育現場で使われている教科書を調べた。使った教科書は全部で11冊である。教科書は各々レベル別に、初級が2冊、中級が5冊、上級が3冊、計10冊を使った。ただし、同レベル、同タイトルで上、中、下に分けられたものは1冊として扱った。

(例—『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』→みんなの日本語)

① 初級—『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』『東外大初級日本語』

中級—『みんなの日本語中級』『東外大中級日本語』『中級を学ぼう前期・中期』『中級へ行こう』

上級—『日本語上級者への道』『上級で学ぶテーマ別日本語』『東外大上級日本語』

② 教科書に出現した接続詞はすべて目で見て手で拾い上げ、そのうち日本人の接続詞の使用頻度20位までの結果と照らし合わせた。20位以下のもの、石黒の基準116個外のもの基準外としてまとめた。また、「ですから」の結果は「だから」に含んだ。

③ 使った文は、例文、本文、問題文などの叙述式文の接続詞はすべて採用した。しかし、練習問題として接続詞が出された場合、問題の例文で複数出されても問題1つについては頻度は1回にした。

④ 短歌、俳句など詩の形式のものは今回の研究では除いた。

⑤ 表3は書き言葉、表4は話し言葉と照らし合わせたもので、表5は基準外である。

### 5. 1. 教科書別接続詞の出現頻度

#### 5. 1. 1. 学習者がよく使っていて教科書の出現頻度が高いもの

まず、表3を見ると、学習者の使用頻度が高いものは「そして」「しかし」「また」「でも」「だから」である。この上位5位までの接続詞は教科書での出現頻度も高い。出現頻度が高い順は「しかし」「また」「そして」「でも」「それから」の順である。「それから」は日本人



表3) 接続詞の教科書での出現頻度一書き言葉

教科書頻度一A
頻度順位一B

日本人書き言葉	初級						中級						上級						総計	
	みんなの日本語		東外大初級日本語		中級を学ぼう		東外大中級日本語		みんなの日本語中級		中級へ行こう		日本語上級話者への道		上級で学ぶ、テーマ別日本語		東外大上級日本語			
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B		
1	12	3	15	2	12	2	24	2	10	2	9	1	2	8	18	1	40	1	142	1
2	12	3	11	3	12	2	16	3	5	4	5	5	5	3	9	3	21	2	96	3
3	6	5	1	9	0	10	32	1	6	3	7	2	15	1	12	2	20	3	99	2
4	0	11	0	10	6	5	2	12	0	13	0	13	0	13	1	11	2	13	11	16
5	4	6	3	8	6	5	7	4	1	10	3	6	0	13	1	11	1	15	26	9
6	18	1	20	1	0	10	0	18	11	1	6	3	4	5	4	5	4	11	67	4
7	0	11	0	10	1	9	2	12	1	10	3	6	0	13	2	7	9	6	18	11
8	3	7	4	6	3	8	3	10	4	6	3	6	3	7	2	7	5	8	30	8
9	1	8	4	6	4	7	3	10	5	4	6	3	9	2	0	16	0	18	32	7
10	27	0	11	0	10	0	10	4	7	3	8	0	13	4	5	3	6	7	21	10
11	17	0	11	0	10	0	10	4	7	0	13	0	13	0	13	7	4	4	11	13
12	9	1	8	8	4	0	10	7	4	1	10	3	6	1	11	2	7	13	4	36
13	17	0	11	0	10	0	10	4	7	0	13	1	10	0	13	0	16	5	8	10
14	43	0	11	0	10	0	10	0	18	0	13	0	13	2	8	0	16	0	18	2
15	26	0	11	0	10	0	10	5	6	0	13	0	13	0	13	2	7	10	5	17
16	11	0	11	0	10	0	10	2	12	0	13	1	10	1	11	0	16	1	15	5
17	10	17	2	5	5	17	1	1	15	4	6	1	10	2	8	1	11	0	18	48
18	23	0	11	0	10	0	10	1	15	0	13	0	13	0	13	1	11	1	15	3
19	51	1	8	0	10	0	10	1	15	3	8	0	13	5	3	0	16	2	13	12
20	62	0	11	0	10	7	4	0	18	0	13	0	13	0	13	1	11	5	8	13
総計		75		71		68		118		54		48		53		66		150		703
異なり個数		11		9		9		17		12		12		12		15		17		

表4) 接続詞の教科書での出現頻度—話し言葉

日本人書き言葉	初級						中級						上級						総計	順位
	みんなの日本語		東外大初級日本語		中級を学ぼう		東外大中級日本語		みんなの日本語中級		中級へ行こう		日本語上級話者への道		上級で学ぶ、テーマ別日本語		東外大上級日本語			
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B		
1	18	1	20	1	7	0	14	11	1	6	3	4	5	4	5	4	7	68	4	
2	12	3	15	2	19	1	24	2	10	2	9	1	2	7	18	1	40	1	149	
3	12	3	11	3	1	7	16	3	5	4	5	5	4	9	3	21	2	85	3	
4	0	10	0	10	0	11	0	14	0	11	0	11	0	10	0	11	0	13	0	
5	6	5	1	8	9	2	32	1	6	3	7	2	15	1	12	2	20	3	108	
6	0	10	0	10	0	11	0	14	0	11	0	11	0	10	0	11	1	9	1	
7	4	6	3	7	6	3	7	4	1	9	3	6	0	10	1	8	1	9	26	
8	1	9	4	5	3	4	3	7	5	4	6	3	9	2	0	11	0	13	31	
9	3	8	4	5	0	11	3	7	4	6	3	6	3	6	2	6	5	6	27	
10	4	6	1	8	2	6	1	10	3	8	1	9	8	3	0	11	0	13	20	
11	0	10	0	10	1	7	5	5	0	11	0	11	0	10	1	8	10	4	17	
12	0	10	0	10	0	11	1	10	0	11	0	11	0	10	0	11	0	13	1	
13	0	10	0	10	0	11	1	10	0	11	0	11	0	10	0	11	1	9	2	
14	0	10	0	10	0	11	0	14	0	11	0	11	0	7	0	11	0	13	2	
15	0	10	0	10	3	4	2	9	1	9	3	6	0	10	2	6	9	5	20	
16	0	10	0	10	0	11	0	14	0	11	0	11	0	10	0	11	0	13	0	
17	0	10	0	10	3	4	2	9	1	9	3	6	0	10	2	6	9	5	20	
18	17	2	5	4	0	11	1	10	4	6	1	9	2	7	1	8	0	13	31	
19	0	10	0	10	0	11	0	14	0	11	0	11	0	10	0	11	0	13	0	
20	0	10	0	10	1	7	4	6	0	11	0	11	0	10	7	4	4	7	16	
総計	77	64		46		100	50	50	44	50	57	117	605							
異なり個数	9	9	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	

表5) 基準外の接続詞

順位	日本人書き言葉20位外		初級				中級				上級				総計								
	学生順位	日本人語	A	B	東外大初級 日本語	中級を 学ぼう	A	B	東外大中級 日本語	みんなの 日本語中級	A	B	中級へ 行こう	A		B	東外大上級 日本語						
23		一方	0	9	0	5	4	2	1	4	0	8	4	1	1	4	5	2	3	4	18	3	
24		まず	4	6	1	8	2	6	1	10	3	8	1	9	8	3	0	11	0	13	20	2	
21		それでも	0	9	0	5	0	12	0	15	0	8	0	7	0	7	4	3	0	19	4	12	
26		けれど	0	9	0	5	0	12	0	15	0	8	0	7	0	7	0	13	1	8	1	26	
28		なぜなら	0	9	0	5	0	12	0	15	0	8	1	3	0	7	0	13	8	1	9	6	
29		このように	0	9	0	5	0	12	1	4	0	8	0	7	0	7	1	7	1	8	3	16	
31		とくにとく	29	0	9	0	5	4	2	3	1	0	8	2	2	1	4	1	7	0	19	11	5
33		とにかく	27	0	9	0	5	0	12	1	4	0	8	0	7	0	7	0	13	0	19	1	26
34		むしろ	43	0	9	0	5	0	12	1	4	0	8	0	7	0	7	0	13	6	2	7	9
35		では	17	2	23	1	2	6	3	1	4	1	0	7	0	7	0	13	1	8	35	1	
37		だけでなく	33	0	9	0	5	1	9	0	15	0	8	0	7	0	7	1	7	0	19	2	22
44		とこみで	51	2	2	0	5	1	9	1	4	0	8	0	7	0	7	2	5	2	6	8	7
45		それとも	37	0	9	0	5	0	12	1	4	0	8	0	7	0	7	0	13	0	19	1	26
49		それにしても	37	0	9	0	5	0	12	0	15	0	8	0	7	0	7	1	7	1	8	2	22
50		それでは	23	1	6	0	5	0	12	0	15	2	3	0	7	0	7	0	13	0	19	3	16
52		それなら	23	0	9	0	5	0	12	0	15	1	4	0	7	0	7	0	13	0	19	1	26
55		そのうえ	33	1	6	0	5	0	12	1	4	0	8	0	7	0	7	2	5	0	19	4	12
57		他方	62	0	9	0	5	0	12	0	15	0	8	0	7	0	7	0	13	1	8	1	26
64		ことに	62	0	9	0	5	0	12	0	15	0	8	0	7	0	7	0	13	2	6	2	22
65		そうしたら	29	0	9	0	5	0	12	0	15	1	4	0	7	0	7	0	13	0	19	1	26
68		けど	51	0	9	0	5	0	12	0	15	1	4	0	7	0	7	0	13	0	19	1	26
73		そのかわり	37	0	9	0	5	0	12	0	15	0	8	0	7	0	7	0	13	1	8	1	26
74		第二	51	0	9	0	5	0	12	0	15	0	8	0	7	0	7	0	13	1	8	1	26
76		反社に	62	0	9	0	5	6	1	0	15	0	8	0	7	0	7	0	13	0	19	6	10
77		第一に	62	0	9	0	5	1	9	0	15	0	8	0	7	0	7	0	13	0	19	1	26
79		ゆえに	62	0	9	0	5	0	12	0	15	0	8	0	7	0	7	0	13	4	3	4	12
80		次に	62	2	2	2	2	2	3	1	4	1	0	3	6	2	0	13	1	8	17	4	
84		かえって	62	0	9	0	5	0	12	1	4	0	8	0	7	0	7	0	13	0	19	1	26
84		第三	51	0	9	0	5	0	12	0	15	0	8	0	7	0	7	0	13	1	8	1	26
		ですから		2	2	0	5	3	4	0	15	0	8	1	3	0	7	0	13	0	19	6	10
		が		1	6	0	5	0	12	0	15	0	8	0	7	0	7	6	1	1	8	8	7
		けれども		0	9	1	3	0	12	0	15	0	8	0	7	1	4	0	13	0	19	2	22
		同時に		0	9	0	5	3	4	0	15	0	8	0	7	0	7	0	13	0	19	3	16
		だからといって		0	9	0	5	0	12	1	4	0	8	0	7	0	7	0	13	0	19	1	26
		しからぬから		0	9	0	5	0	12	1	4	0	8	0	7	1	7	1	7	1	8	3	16
		最後に		0	9	0	5	0	12	0	15	0	8	0	7	3	3	0	13	0	19	3	16
		さらには		0	9	0	5	0	12	0	15	0	8	0	7	0	7	4	3	0	19	4	12
		そのゆえ		0	9	0	5	0	12	0	15	0	8	0	7	0	7	0	13	3	4	3	16
		それも		0	9	0	5	0	12	0	15	0	8	0	7	1	7	0	13	0	19	1	26
		総計		15	27		29		19		13		13	10	20		29		39				
		票なり個数		7	3		10		13		6		5	4	4		12		19				

の使用頻度としてはそれほど高くはないが、教科書でよく用いられることで学習者の使用頻度は高くなったといえる。出現順位が5位内ではないが、「だから」は出現順位9位で、日本人も学習者もよく使用している。

表4でも、教科書で出現頻度が高いものは学習者もよく使っている。この二つの表から見えるのは初級教科書でよく使用されている接続詞が学習者の使用頻度の高い順と繋がっているということである。基礎の大事さを語る結果であろう。

表5は日本人も学習者も低頻度の接続詞だが教科書に出現するものを集めたものである。ここで「では」の出現頻度の総計だけを見ると、書き言葉や話し言葉の出現順位10位内に入るくらいで、学習者の使用順位も17位である。この総計数は日本人の使用頻度の約2倍に当たる。また、日本人の使用順位は21位だが、学習者の使用頻度、教科書の出現頻度が高い「まず」も見られる。「まず」は初級教科書からよく出現していて、表5では「では」に続き、出現頻度が高い。

この分析から、1) 学習者は教科書の出現頻度が高いものをよく使う。2) 初級教科書の出現頻度が高いものをよく使う。という結論が得られた。

### 5. 1. 2. 学習者があまり使っていないが教科書出現頻度が高いもの

表3からみると、「ところが」「さらに」「しかも」「すなわち」などが挙げられる。「ところが」は教科書の出現順位10位で、日本人の使用順位も11位のよく使われる接続詞であるが、学習者の場合には27位で使用頻度が低いものである。接続詞全体に占める割合も日本人の方が約5倍高い。「しかも」「さらに」「すなわち」は教科書の出現順位が12, 13, 14位でそれほど高くはないが、学習者の使用順位がかなり低く、それぞれ26, 17, 62位である。使用順位26位はそれほど低くないように思えるが、比率で比較すると日本人の方が学習者の約4倍に達する。17位の「さらに」も同じく使用順位は日本人より下位だし、62位の「すなわち」は1件も出現していない順位である。

表4でもこのような現象は変わらず「それに」「まず」「しかも」「さらに」などが教科書の出現頻度は高い方だが、学習者の使用頻度が低い接続詞である。「さらに」は表3でも挙げられた語で学習者の使用頻度が11件であったが、表4では使用頻度が0であった。「それに」は18位で0.3%の割合を見せたが、「まず」「しかも」も0%である。

しかし、「まず」の場合は少し事情が違う。「まず」は書き言葉では学習者の使用順位8位の接続詞で21位の日本人よりもよく使う語である。この理由についての分析は5. 2. 教科書別教え方で詳しく取り上げることにする。

表5では「次に」が出現順位4位であるが、学習者の使用頻度は低いものである。「次に」は日本人の使用頻度も低い、この接続詞は列挙の接続詞で一番目に「最初は」や「第一に」などの接続詞が出てから使える語であるため、使い方に制限があるといえる。

この分析から、1) 教科書の出現頻度が高く日本人の使用頻度も高いが、学習者の使用頻度は低い語があり、その語は書き言葉と話し言葉で差異がある。2) 「まず」のように教

科書の出現頻度とが高い語で、接続詞の役割によっては学習者の書き言葉と話し言葉での使用頻度の差が激しいものがある。ということがわかった。

### 5. 1. 3. 学習者がよく使っているが教科書出現頻度が低いもの

表3では「そのため」が、表4では「ただ」、表5では「けれど」が挙げられる。この3つの接続詞は教科書の出現頻度は最下位に近いが、学習者の使用頻度はそれぞれ11位、9位、14位である。この3つの接続詞は日本人も使用頻度は低くない。

これらの接続詞を使用している学習者の例をみると、「そのため」の場合、使用学習者は初級が1人で、残りは中級と上級が半分ずつであった。「ただ」は使用学習者のうち初級学習者は1人もいなく、中級が一番少なくて、上、超級はほぼ同じくらいであった。最後に「けれど」も初級学習者は使用していなかったが、中級が非常に多く、上級も全体の1/3程度を示していた。それに、「ただ」の場合はやや誤用が見つかり、「そのため」は「そのために」や「そのためには」のように、「けれど」はほとんどが「けれども」のように助詞をつけて少し違う形態にして使う例が多かった。

このように、出現頻度が低い、使用学習者が中級以上で多いということはただ教科書だけではなく多様な媒体を通して日本語を学習していると考えられるだろう。この3つの接続詞は日本人の使用頻度もある方なので、日本語に接することが容易な日本語の本、テレビなどから影響を受けたと推測できる。

この分析から1)教科書の出現頻度が低いもので学習者によく使われる接続詞は日本人がよく使っていて、授業ではない媒体で学習していると考えられる。2)1)のことを踏まえて、そのような接続詞は日本語のレベルが高いほど使っていて、やや誤用などが見られる。ということが読み取れた。

教科書の接続詞の出現頻度を分析したこのパートでは、前提としていた「外国語を学ぶ学習者は学んだものは使える、学んでいないものは使えない」ということが必ずしも該当しないことがわかった。これは教科書でよく扱うかということより、どのように教えているかのところに答えがあると考えられる。この考えを裏書きするため私は教科書の教育指導案、解説などを分析して行こうと思う。

### 5. 2. 教科書別教え方

これまでの分析により、学習者は日本人に比べて接続詞の使用が偏っていて教科書で扱っている語の使用率が低い、もしくは教科書に出現しない語の使用頻度がたかいなどの現象があることが分かった。第2章の「学習者の接続詞使用に関する意識調査」から、学習者は接続詞の使い方に難しさを感じていてもっと多様な例文などを挙げて欲しい、詳しく教えて欲しいなどの意見をだしていた。私は以上のことから接続詞の教え方に問題の原因があるのではないかと思い、教え方を分析して行こうと思う。

この分析で「1 教科書別接続詞の出現頻度」で使った11冊の教科書の指導書、文法解説

書などを用いた。

### 5. 2. 1. 初級教科書の教え方

初級の教科書は『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』と『東外大日本語初級』を用いた。『みんなの日本語』の場合には「教え方の手引き」があり、各課で必ず教えるべき項目が詳しく説明されている。『東外大日本語初級』は文法解説の本が英語版であり学習者が参考書として使用できるように各課別文法の説明と例文が載っている。指導案や解説書などがあるのは教える側にとって何を教えるべきか分かりやすいが逆にいうと、教える項目として挙げられていないものは教師の力量に任せることになる。

5. 1. 2で挙げていた「まず」をみてみよう。goo 事典によると「まず」は副詞として使われると書いてあり、詳しくは次のように説明されている。

- 1) はじめに。最初に。
- 2) とりあえず。ともかく。何はともあれ。
- 3) ある程度の確信をもって判断や見通しを述べるときに用いる。おおよそ。多分。

一般的にはこのように副詞として使われるが、石黒(2008)は列挙の接続詞として、時間的順序性の有無を問わずに使える、汎用性広い語であると述べている。

しかし、学習者の書き言葉で「まず」が使われた文を分析すると、39件のうち36件が説明の際に「一番目は」の意味であった。「まず」を『みんなの日本語』ではあることについて説明する場合「一番目は」のような意味で教えている。例文もATM機の使い方「まず、～次に～、それから～」の流れでいうように書いてある。もう一方の教科書の『初級日本語』では文法説明で扱っていない。このようなことから学習者にとって「まず」は順番を示す場合にだけ使えると学習されたかもしれないという仮説がたてられる。

学習者の話し言葉では「まず」の使用例が0件であったが、これはコーパスの基盤になったものがインタビュー形式であったため、「順番を説明」という場面が少なかったことが理由であると考えられる。

だが、「まず」には順番を示すという役割以外に、「とりあえず」という役割もあると前述した。これは厳密にいうと副詞的使い方であるが、このような役割もあるということをお教えできなかったため「まず」を「一番目」の意味で使う例が多かったと思われる。学習者は教わったものでないと、様々な使い方があるということに気がつきにくいと考えるからである。

初級の段階であまり多くの知識を伝えようとしても学習者は混乱してしまう。初級では本当に必要なものをダイジェストして教えなければならない。だが、前述したように学習者は初級で学んだものはレベルが上がっても使用頻度が高く、学習者がよく間違えるものであるのなら初期の段階で教えた方がいいのではないだろうか。

### 5. 2. 2. 中・上級教科書の教え方

初級教科書とは違って、中級教科書からは「教え方の手引き」のようなものがない本が多

い。今回の分析に使った教科書のうち、東京外国語大学から出た教科書だけ各レベルの教科書ごとに文法解説が付いているが、それ以外の教科書にはそのようなものが別れない。そのかわり、それぞれの本の巻末などに学習項目が整理されている。

このことが意味することは、教える教師の意識により接続詞をどのように教えるかが決まるということである。『中級を学ぼう』と『中級へ行こう』では接続詞を各課で取り上げているが、すべてを取り上げてはいない。それに、取り上げたとしても、その接続詞が入った例文だけを2文程度で提示するか、2つの例文の間に入るものをいくつかの例から選んで入れる練習に止まっている。また、様々な学習項目の最後に提示されるので、優先順位が高くないような印象を受ける。

日本人の使用頻度が高い語であるものは、日本語のレベルとして初級で出しにくいものだったら、中級から多様な例文で馴染ませることが大事だと考える。例えば、「それから」「それに」のように誤用が多いものは対照させて出してその違いを明確にするような工夫が必要であろう。学習項目としてどのように取り上げるべきかを考えていきたい。

## 6. 結論

このような結果から、現在の日本語教育のなかで接続詞は学習者のニーズに充分に応えられていないといえるだろう。特に、日本人の使用頻度が高く、教科書の出現頻度も高い語で学習者の使用頻度が低い語については更なる研究が必要だとみられる。また、学習者の使用頻度が高くても誤用が多い語やいくつかの用法のうち一つの用法のみよく使われる語は教え方にもっと工夫する必要があるだろう。

初級の段階で学習者に教えられるものには限界がある。接続詞は文が長く、複雑になるにつれて用いるようになる品詞であるため、初級で優先して教える必要はないだろう。しかし、優先するものではないとしても、初級で出現する語で学習者の誤用が多い語であるとしたらその教え方は教師の力量に任せるのではなく、きちんとした学習項目として取り入れる必要があると考える。

今回、本稿の検査で使った学習者作文コーパスとKYコーパスは作文の主題や、インタビュー形式ということから接続詞の使用頻度の調査の結果に十分でないところがあったと思う。ゆえに、これから発表されたコーパスのみならず、直接学習者の文章などを調べ、稿を改めていきたいと思う。

また、このような研究を重ねて改善すべき教育方法を直していき、学習者のニーズに合わせた教育方法を提案していきたい。

## 参考文献

一論文・書籍

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘、2008年4月14日、『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』、株式会社スリーエーネットワーク
- Lee, Tae-Kwun (2011)「日本語逆接続詞「ところが」と「しかし」の意味分析」『東釜山大学院論

文集] 第30号

- 石黒圭、2008年9月20日、『文章は接続詞で決まる』、株式会社光文社
- 石黒圭、2007年10月10日、『よくわかる文章表現の技術』、株式会社明治書院
- 李 Heynsuck (2006) 「高等学校の日本語教科書に現れた接続詞研究—学習者の理解度を中心として—」、新羅大学教育大学院
- 金蘭美 (2013) 「第三部「論文編」について」第86回—第2言語習得研究会 (関東)
- 鈴木英子 (2005) 「日本語接続詞運用に関する考察—韓国人学習者の誤用分析を通して—」、東国大学教育大学院
- 崔美淑 (2008) 「日本語接続詞の分類方式」韓南大学教育大学院
- 宮島達夫・仁田義雄、1998年3月10日、『日本語類義表現の文法 (下)』、版元くろしお出版
- 山下直 (2008) 「学習者の「そして」使用の実態—「オツベルと象」のあらすじの分析を通して—」、『月刊国語教育研究』(429) 46-51

—教科書

- 阿部裕子外6人、2000年4月10日、『上級で学ぶ日本語』、研究社出版株式会社
- 石沢弘子外4人、2008年3月25日、『みんなの日本語初級Ⅰ教え方の手引き』、株式会社スリーエーネットワーク
- 石沢弘子外4人、2008年6月4日、『みんなの日本語初級Ⅱ教え方の手引き』、株式会社スリーエーネットワーク
- 沢田幸子外8人、2009年3月3日、『みんなの日本語中級Ⅰ本冊』、株式会社スリーエーネットワーク
- 田中よね外5人、2011年2月28日、『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』、株式会社スリーエーネットワーク
- 田中よね外5人、2011年2月28日、『みんなの日本語初級Ⅱ本冊』、株式会社スリーエーネットワーク
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター、1998年6月20日、『初級日本語』、株式会社凡人社
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター、1998年10月20日、『上級日本語』、株式会社凡人社
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター、2000年11月20日、『中級日本語』、株式会社凡人社
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター、2005年4月1日、『中級日本語—語彙・文型例文集』、株式会社凡人社
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター、2005年12月15日、『初級日本語文法解説英語版』、株式会社凡人社
- 荻原雅佳子外3人、2005年7月29日、『日本語上級話者への道—きちんと伝える技術と表現』、株式会社スリーエーネットワーク
- 平井悦子、三輪さち子、2006年2月8日、『中級へ行こう—日本語の文型と表現59』、株式会社スリーエーネットワーク
- 平井悦子、三輪さち子、2007年9月20日、『中級を学ぼう—日本語の文型と表現56中級前期』、株式会社スリーエーネットワーク
- 平井悦子、三輪さち子、2009年11月6日、『中級を学ぼう—日本語の文型と表現82中級中期』、株式会社スリーエーネットワーク

—WEB サイト

- goo 事典 <http://dictionary.goo.ne.jp/>
- 少納言—KOTONOHA 「現代日本語書き言葉均等コーパス」<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>
- 日本語学習者の話し言葉を調査する「タグ付き KY コーパス」<http://jhlee.sakura.ne.jp/kyc/>
- 日本語学習者作文コーパス <http://sakubun.jp.org/>